

裏磐梯殺人事件

広田弦一



行方不明になった夫

1 行方不明になった夫

裏磐梯で最も人気のある観光スポットは五色沼周辺であろう。

五色沼といっても、五色沼という沼があるのではなく、その水の色合いが変化していく十数個の沼を五色沼というのだ。そして、その五色沼の中でも毘沙門沼周辺が最も人の賑わいが見られ、正に毘沙門沼周辺が裏磐梯観光のメインスポットなのだ。

正に裏磐梯観光のメインスポットというだけあって、毘沙門沼周辺にある土産物店や食堂はかなりの賑わいが見られ、また、その近くにある駐車場はマイカーや観光バスの出入りがひっきりなく見られ、それらのことから毘沙門沼、そして、五色沼の人気振りが充分に察せられるというものだ。

また、駐車場はその土産物店の近くにあるだけでなく、少し離れた所にもある。そして、その駐車上は国道459に面していて、毘沙門沼までは少し歩かなければならないので、毘沙門沼とか五色沼周辺を散策しようという人は、土産物店近くの駐車場にまで行こうとするだろうが、それは止めた方が無難だ。というのは、その駐車場はさ程大きくない為に、車を止められないことも往々にしてあるからだ。それ故、土産物店から少し離れた方の駐車場を利用した方が無難であろう。その駐車場の方が遥かに大きく、また、車の出入りも遥かに楽だからだ。

それはともかく、今、時刻は午後四時を少し過ぎていた。といっても、まだ十月の終わりである為に、まだまだ辺りは充分に明るかった。また、紅葉の季節だということもあって、毘沙門沼周辺には、まだまだ人の賑わいが見られた。

そして、毘沙門沼から少し離れた所にあるその大きな駐車場には、まだ相当数の車が止められていた。

やがて、午後五時になった。午後五時ともなれば、車の数はめっきりと減った。正にその大きな駐車場に止められている車の数は容易く数えられる位に激減していたのだ。

そして、その数少なくなった車の中で、もう三十分を越える位、時を過ごしている人物がいた。その人物は三十位の女性で、その車はトヨタのパッツであった。

それはともかく、その女性の様は些か妙に思われた。というのは、一体何故、車の中で三十分も時を過ごさなければならないのかということだ。この裏磐梯のメインスポットである五色沼に来たにもかかわらず、車の中でじっとしてるといのは、如何なものか？ 身体の具合でも悪いのであろうか？

否。そうではない。そのパッツに乗車してる女性は、何ら身体の具合は悪くはないのだ。

では、何故車の中でじっとしてるといのだろうか？

それは、実のところ、女性は人を待っているのだ。

その女性の名前は早野麻由子（30）で、東京に住んでいる専業主婦なのだが、その夫である久雄（33）と一泊二日の予定でこの裏磐梯観光にやって来たのだが、その久雄がなかなか麻由子の前に姿を見せないのだ。

では、久雄は今、何処にいるのだろうか？ 麻由子を車の中で三十分も待たせて、一体何をしてるのだろうか？

その疑問に今から答えることにする。

実のところ、麻由子は五色沼探勝路を三十分程前に一時間程掛けて歩き終え、この駐車場に戻って来たのである。

五色沼探勝路とは、毘沙門沼、赤沼、るり沼など十数個の沼に沿って設けられた探勝路で、全長四キロ程あり、約一時間程で歩ける。そして、その出発点は毘沙門沼方面からと桧原湖に近い所にある柳沼方面側の二箇所ある。

それはともかく、久雄と麻由子は妙なことを考え、そして、実行した。

その妙なことは、久雄と麻由子が二人して一緒に五色沼探勝路を歩くのではなく、それぞれ別の出発点から五色沼探勝路を歩くというものであった。

即ち、麻由子は毘沙門沼側から、久雄は柳沼側から歩くというわけだ。

では、何故そのようなことを考え、実行したのかというと、それには訳がある。

その訳とは、もし二人して毘沙門沼側にしろ、柳沼側からにしろ歩いたとすると、一体どのようなことになってしまうだろうか。

その答えは深く考えるまでもない。四キロもある探勝路を最後まで歩き切ってしまったら、その四キロをまた戻って来なければならないのだ。即ち、二人は八キロも歩かなければならないというわけだ。

無論途中で引き返すという手もある。しかし、折角五色沼までやって来たのだから、最後まで歩き通したいというのが、人間というものであろう。それ故、久雄が毘沙門沼近くで麻由子を車から降ろし、麻由子が毘沙門沼側から探勝路を歩き始め、久雄は車で柳沼側まで行ってはその近くの駐車場に車を停めておく。やがて、麻由子が探勝路を歩き終え、早野夫妻の車の許に行き着き、麻由子がその車に乗って毘沙門沼側の駐車場に行き、そして、そこで久雄と落ち合う。二人が考え出した手とは、こういう具合だったのである。

しかし、この考えをよく考えてみると、妙とはいえないかもしれない。それどころか、正に名案といえるかもしれない。二人で五色沼探勝路を歩き切ろうとすれば、正にこの手を使ったらよいのではないのか。正に、世に指針を示す名案とでもいえるかもしれないのだ。

それはともかく、本来なら既に久雄はこの駐車場にいる筈であった。何しろ、久雄は男であり、麻由子は女だ。それ故、久雄の方が麻由子より早く探勝路を歩き終える筈なのだ。それ故、麻由子が車に乗ってこの駐車場に着くよりも五分か十分程早くこの駐車場に姿を見せている筈なのだ。だが、実際には久雄の姿はまだ見られないのだ。

麻由子が今、車を停めている駐車場はかなり広いので、久雄が麻由子が乗っている車を見付け出せないと思うかもしれないが、その疑問は全く話にならないものだ。というのは、いくら広い駐車場といえども、既に五時を過ぎてる為に駐車場に停められてる車の数は甚だ少なく、更に、麻由子は駐車場から毘沙門沼に続く道はかなり近くに車を停めている。それ故、麻由子が乗った久雄自身の車に気が付かない筈はないのだ。

それで、麻由子は些か神妙な表情を浮かべ、また、時々腕時計に眼をやりながら、久雄の到着

を待っていたのだが、一向に久雄がその姿を麻由子に見せないのだ。

もともと、毘沙門沼近くには土産物店があるので、久雄が土産物を物色してないとも限らない。しかし、麻由子を四十分も待たせる程久雄は無頓着な男ではないだろう。

そう！ 麻由子はこの駐車場に来て、既に四十分も経過してしまったのだ。だが、依然として久雄はその姿を見せないのだ！

麻由子は遂に堪らなくなり、車から降りては、毘沙門沼に向かって歩き始めた。二時間近く前に麻由子がこの道を歩き始めた時は、まだまだ少なからずの人の姿が見られたが、暮色に包まれつつあったともなれば、毘沙門沼の方に向かって歩いている人は、麻由子以外は誰もいないという有様であった。もともと、毘沙門沼の方から駐車場に向かって歩いてる人はちらほら見られた。それ故、それらの人を注意深く麻由子は眼をやったのだが、やはり久雄の姿を眼には出来なかった。

やがて、麻由子は土産物店の所まで来てしまった。その土産物店も既に二時間前の賑わいはすっかり見られなくなっていて、店内には数える位の人しか眼に出来なかった。

とはいうものの、麻由子とはにかく土産物店内に久雄がいないか、眼をやった。だが、やはり、久雄の姿は見られなかった。

その事実を目の当りにして、麻由子の表情は一層曇った。何しろ、久雄と別れてそろそろ二時間が経とうとしてるのだ。五色沼探勝路は一時間で歩けるのだ。それなのに、まだ久雄が姿を見せないとは……。

確かに、麻由子はどの辺りとまでは正確に分からないが、探勝路の途中で久雄と間違いなく会ったのだ。それ故、久雄が探勝路を歩いていたのは間違いないのである。

それなのに何故？

その理由が麻由子にはまるで分からなかった……。

とはいうものの、とにかく一旦駐車場に戻ることにした。

駐車場に戻っても、やはり久雄の姿は見られなかった。

既に、久雄と別れて二時間以上の時間が経過した。にもかかわらず、久雄の姿がまだ見られないともなれば、何かアクシデントが発生したのではないかという思いを麻由子が抱いても別に不思議ではなかった。

といっても、何も危険な登山道を歩くわけでもない。五色沼探勝路は、小学校低学年でも歩ける道なのだ。そのような所で事故が起こるなんてことはまず有り得ないであろう。

となると、考えられることは、何か手違いが発生したということだ。例えば待ち合わせ場所を間違えたというようなケースだ。

しかし、そのケースもまず有り得ないと思われた。というのは、何しろ麻由子は探勝路の途中で久雄と会ったのだ。そして、そのことが待ち合わせの場所に手違いがなかったということを如実に証明しているのだ。また、万一そのようなケースが発生したとしても、久雄が毘沙門沼方面に来たことは間違いのないのだ。となると、この駐車場にやって来ない筈はないのだ。

そう思うと麻由子の表情はかなり深刻なものへと変貌せざるを得なかった。もし、久雄が携帯電話を持っていれば、とくにその携帯電話に電話していたことだろう。しかし、久雄の携帯電話

話は東京の自宅に置いて来たのだ。

さて、困った。

時間は刻一刻と経過し、後少しで六時になろうとしていた。久雄と別れて既に三時間になろうとしていたのだ。

こうなってしまうえば、久雄に何かアクシデントが発生した可能性が高くなったと看做さなければならぬのではないかと。

しかし、今の時点ではまだ警察に届け出るわけにもいかないだろう。そのようなことをやれば、警察に手間を掛けるだけだろう。

そう思った麻由子は、まだしばらくこの場所で久雄を待ってみることにした。

そして、遂に午後七時となった。つまり、久雄と別れて四時間が経過したというわけだ。にもかかわらず、久雄は姿を見せないのだ。

こうなれば、麻由子はこの場所に留まっても無駄だと思った。

それで、車のエンジンを掛け、車を桧原湖方面に向けた。即ち、久雄によってこの車が止められた柳沼近くの駐車場に久雄がいないか麻由子は見に行こうとしたのだ。

そして、やがてその駐車場に着いたのだが、やはり久雄の姿は見られなかった。

それで、再び先程の駐車場に戻ったのだが、やはり久雄の姿は見られなかった。

そうかといって、今から五色沼探勝路に行って久雄を探すわけにもいかなかった。何しろ、今やすっかり夜になっていたからだ。探勝路に街灯とかいった明かりがないことは当たり前だ。

それで、麻由子は一旦今夜の宿泊先のホテルに行くことにした。そのホテルへはここから徒歩で五分位の距離だ。それ故、車がなくてもそのホテルにはこの場所から行けるし、また、久雄は無論そのホテルの場所を知っている。

それ故、ひょっとして久雄はそのホテルで麻由子のことを待っているかもしれない。久雄と麻由子の間で何か手違いがあったのかもしれないのだ。

そう思いながら、麻由子は宿泊先のホテルに行き、エントランスから中に入ったのだが、ロビーには久雄の姿は見られなかった。

それで、とにかくチェックインを済ませ、そして、フロントマンに久雄のことを訊いてみたが、フロントマンは知らないと応えた。

それで、とにかく麻由子は久雄と麻由子の室である205号室に行き、旅装を解き、そして室の中で久雄を待っていたが、やはり久雄は現れなかった。

しかし、麻由子とて室の中で待つばかりいられなかった。というのは夕食時間は八時半までなのだが、既に八時を過ぎてしまった為に、この辺でやむを得ず夕食を食べざるを得なくなってしまったのだ。室の中で久雄を待っていても、久雄が現れるとは限らないからだ。

それで、「孔雀の間」という夕食会場に一人で行き、そして、とにかく一人で夕食をとる羽目に陥ってしまったのだ。そして、本来ならとても美味しい筈のその食事を十分に味わうことが出来ずに、麻由子は「孔雀の間」を後にしたのだ。

そして、室に戻って大浴場に向かうこともなく久雄を待っていたのだが、一向に久雄は現れなかったのである。

2 発見された遺体

結局、昨日は入浴することもなく麻由子は一日を終え、朝を迎えた。そんな麻由子は、昨日は随分気苦労をした為かぐっすり熟睡してしまったのだ。

だが、そうだからといって、久雄の姿はやはり見られなかった。こうなってしまえば、やはり何かアクシデントが発生したと思って当然であった。

それで、とにかく麻由子はフロントに行っては事の次第をフロントマンに話してみた。

そんな麻由子の話に、その四十位のフロントマンは何ら言葉を挟むことなく耳を傾けていたが、麻由子の話が一通り終わると、

「まだ、それに関して特に情報は入っていませんがね」

と、いかにも殊勝な表情を浮かべて言った。

それで、麻由子は朝食を食べてから五色沼探勝路をもう一度歩いてみようと思った。久雄は何しろ五色沼探勝路を歩いてから行方不明となってしまうのだ。それ故、久雄の失踪の秘密は、五色沼探勝路にあると麻由子は思ったのだ。

それ故、麻由子は朝食を食べ終わると、一旦205号室に戻り、そして出発の準備をしていたのだが、すると、その時、室内電話の呼出音が鳴った。

それで、麻由子は送受器を手にしては、

「もしもし」

「先程早野様からご主人の話を伺ったフロントの奥田ですが。」

そう奥田に言われ、麻由子は固唾を呑んで次の奥田の言葉を待った。

すると、奥田は、

「一実はですね。先程僕は警察に問い合わせをしてみたのですよ。すると、言いにくいことなんです。今朝曾原湖キャンプ場の近くで男性の遺体が見付かったらしいのですよ。」

そう奥田に言われても、麻由子は言葉の発しようがなかった。何故なら、麻由子は何と言えればよいのか分からなかったからだ。

それで、麻由子は言葉を詰まらせていると、奥田は、

「一まだ、その男性の身元は分かってないそうなんです。その年齢とか身体つきなんかが、先程早野さんが話された男性のものとよく似てると思いますね。」

そう奥田に言われ、麻由子の表情は忽ち蒼白となった。しかし、それは当然のことと言えるだろう。フロントマンの奥田が語った曾原湖キャンプ場近くで遺体で見付かったという男性は、久雄である可能性は十分に有り得ると思われたからだ。

しかし、まだ久雄と確定したわけではない。

それで、麻由子は気丈な表情を浮かべながら、

「その方の遺体を眼にしてみなければ、まだ主人だと断言出来ません」

「一早野さんのおっしゃることはもっともなことだと思います。」

奥田は神妙な表情を浮かべては言った。

「で、その方の遺体は、今、何処にあるのでしょうか？」

—そこまでは、知らないですよ。

奥田は、再び神妙な表情を浮かべては言った。

それで、麻由子はそれに関して警察に問い合わせてみた。

すると、その男性の遺体は今、福島市内にあるK病院で司法解剖されているとのことだ。

それで、麻由子はとにかくそのK病院にまで行っては、その男性が久雄なのか確認してみることにしたのだ。

3 久雄の過去

麻由子はその日の昼前にはK病院に着き、直ちにその男性の遺体を眼にしてみた。

すると、その男性はやはり久雄であった。

その衝撃的な事実を目の当たりにして、麻由子は気絶しそうな塩梅であった。

だが、何とか気を取り直し、福島県警の森永栄一という五十位の警部と話をすることになった。

森永はその厳しそうなその顔を一層厳しくさせては、

「先程司法解剖が終わりましてね。で、その結果、ご主人の死は殺しによるものと判明したのですよ」

そう森永に言われると、麻由子は一層表情を引き攣らせては、

「殺しですか……」

「そうです。後頭部を鈍器なんかで殴打されましてね。その結果、さ程時間を経ずにお亡くなりになられたと思われるのです。また、死因は脳挫傷でした」

と、森永はいかにも神妙な表情を浮かべて言った。

すると、麻由子は表情を引き攣らせたまま、言葉を発しようとはしなかった。そんな麻由子は、今の森永の言葉に大いに動揺し、言葉を発することが出来ないと言わんばかりであった。

そんな麻由子に、森永は神妙な表情を浮かべたまま、

「で、奥さんはご主人を殺した犯人に心当たりありませんかね？」

と、麻由子の顔をまじまじと見やっては言った。

すると、麻由子は渋顔を浮かべては、言葉を詰まらせた。

そんな麻由子を見て森永は、昨日の久雄と麻由子のことを訊いた。

それで、麻由子はそれを有りの儘話した。

森永はそんな麻由子の話は何ら言葉を挟むことなく、じっと耳を傾けていたのだが、麻由子の話が一通り終わると、

「では、ご主人は五色沼探勝路を歩いていた時に、行方不明となってしまったのですかね？」

と、いかにも信じられないと言わんばかりに言った。

「そうなりますね」

森永から眼を逸らしてはいたものの、麻由子もいかにも信じられないと言わんばかりに言った。

すると、森永はいかにも険しい表情を浮かべては、少しの間、何かに思いを巡らすかのような仕草を見せては言葉を詰まらせていたが、やがて、

「奥さんが毘沙門沼近くの駐車場に着いたのは何時頃だったのですかね？」

「四時二十分頃だったと思います」

「何時頃、奥さんは毘沙門沼から歩き始めたのですかね？」

「午後三時頃でしたね」

「ご主人はその後、柳沼側に車で行き、柳沼側から五色沼探勝路を歩き始めたのですね？」

「そうです」

と、麻由子は小さく肯いた。

「で、ご主人と途中で会ったというのは間違いないのですかね？」

森永は麻由子の顔をまじまじと見やっては訊いた。

「間違いないです」

麻由子は再び小さく肯いた。

「どの辺りで会ったのですかね？」

森永は些か興味有りげに言った。

「それが、どの辺りなのかよく分からないのですよ。何しろ、私は五色沼探勝路を歩いたことは今までになかったのです」

と、麻由子は些か決まり悪そうに言った。

「では、ご主人と会ったのが何時頃だったかは分からないのですかね？」

「それも、分からないのですよ」

と、麻由子は再び些か決まり悪そうに言った。

すると、森永は唇を歪め、そして、

「奥さんが毘沙門沼近くの駐車場に着いたのが午後四時二十分だったのですね？ それは間違いないのですね？」

「ほぼ間違いないですね」

と、麻由子は小さく肯いた。

すると、森永も小さく肯き、そして、

「ご主人が柳沼側を出発したのは大体三時十分頃と思われます。そして、五色沼探勝路を歩き終えるのには大体一時間位ですから、ご主人は四時十五分位には奥さんが待っていた駐車場に着いたと思われます」

「私もそう思います」

麻由子は森永に相槌を打つかのように言った。

そんな麻由子を見て、森永は、

「そうですよね。となると、ご主人が五色沼探勝路を歩き終えてから五分か十分位の僅かな間に何か異変が起こったのですよ」

と言っては小さく肯いた。

「……」

「で、ご主人の死亡推定時刻も明らかになっていましてね」

そう言っは森永は麻由子の顔をまじまじと見やっは言った。

「で、ご主人の死亡推定時刻は、午後四時から五時頃なんですよ」

「……」

「つまり、ご主人は五色沼探勝路を歩き終えてからさ程時間を経ずに殺されたと思われるので

すよ」

と、森永は再び麻由子の顔をまじまじと見やっては言った。

だが、麻由子は表情を引き攣らせたまま、何も言おうとはしなかった。

そんな麻由子の顔を森永はまじまじと見やっては、

「それに関して、奥さんは何か心当たりありませんかね？」

すると、麻由子は、

「よく分からないですね」

と、渋面顔で言った。

すると、森永は、

「ご主人が見ず知らずの者に殺されたという可能性は、極めて小さいと思われるのですよ。もし、毘沙門沼周辺でご主人が見ず知らずの者と偶然にトラブルが発生したとすれば、その目撃者がいる筈なんですよ。午後四時台ともなれば、その頃は毘沙門沼周辺には人が少なからずいますからね」

と、いかにも自信有りげな表情と口調で言った。

「また、ご主人が曾原湖周辺で殺されたとすれば、犯人と共に曾原湖に行ったのですよ。何故なら、ご主人が曾原湖にまで行く足がありませんからね。そうですよね、奥さん」

と、森永は自らの推理に対する同意を麻由子に求めた。

すると、麻由子は、

「そうですね。何しろ、その頃、私が車に乗っていましたからね」

と、いかにも決まり悪そうな表情を浮かべては言った。

すると、森永は小さく肯き、

「で、ご主人はこの五色沼周辺で知人と出交したのではないですかね。そして、その知人はご主人と仲が良くないと思われるのですが。それに関して、奥さんは何か心当たりありませんかね？」

「……」

「では、この五色沼周辺、あるいは裏磐梯周辺でご主人の知人はいなかったのですかね？」

と、森永は眉を顰めては、麻由子の顔をまじまじと見やっては言った。

すると、麻由子は眼を大きく見開き、

「知人はいると思います」

そう麻由子に言われると、森永は、

「ほう……」

と、いかにも興味有りげな表情を浮かべては呟くように言っは、

「それ、一体どういった人ですかね？」

と、麻由子の顔をまじまじと見やっては言った。

「主人が学生だった頃、この近くでアルバイトをしてたらしいのですよ」

「アルバイトですか……」

森永は眉を顰めて言った。何故なら、学生時代のアルバイトでは、久雄の殺しには繋がらない

と思われたからだ。

とはいうものの、

「で、どのような所でアルバイトをやったのですかね？」

「ペンションです。『木馬』とかいうペンションでアルバイトをやっていたみたいです」

「そうですか……。で、その時にご主人は何かトラブルに巻き込まれたりしてなかったのですかね？」

と、森永は眉を顰めて訊いた。

すると、麻由子も眉を顰めて、少しの間言葉を詰まらせていたのだから、やがて、
「主人はその時に盗撮を行っていたらしいのですよ」

と、いかにも決まり悪そうな表情を浮かべては言った。

「盗撮ですか……」

「ええ。そうです。何でも、客室に隠しカメラを仕掛けては、密かにお客さんのことを盗み見してみたいですよ」

「ご主人がそう言っていたのですかね？」

「ええ」

麻由子は森永から眼を逸らしては、いかにも言いにくそうに言った。

「ふむ。で、『木馬』のオーナーはその盗撮のことを知っていたのでしょうかね？」

「さあ……。どうでしょうかね」

と、麻由子は顔を赤らめては森永から眼を逸らし、いかにも言いにくそうに言った。

森永はといえば、そう麻由子に言われると、甚だ表情を陰しくさせては言葉を詰まらせた。何故なら、今の麻由子の言葉は、正に事件を解決に至らせる重要なものと思われたからだ。

即ち、『木馬』のオーナーが久雄が盗撮をしていたことを知っていたとなれば、当然久雄に対して強い憤りを抱く。そんな久雄と偶然に毘沙門沼近くの駐車場で顔を合わせてしまう。すると、オーナーは久雄に話があるとか言って曾原湖近くに連れて行き、そこで激しい口論となってしまう、その結果、久雄はオーナーに鈍器なんかで殴られ、死に至ったというわけだ。その可能性は十分に有り得るだろう。

そう思うと、森永は小さく肯き、そして、

「そのペンションの関係者以外で、ご主人の知人はいないのでしょうかね？」

すると、麻由子は、

「それ以外では分からないですね」

更に、森永は何だかんだと麻由子から話を聴いたが、特に捜査に役立つような証言は入手出来なかった。

それで、この辺で麻由子に対する聞き込みを終え、早速、『木馬』のオーナーから話を聴いてみることにした。

4 木馬のオーナーの証言

『木馬』は、曾原湖の近くにあり、オーナーは河原治郎（57）という粹な感じの男性であった。

そんな河原がオーナーをしている『木馬』を、森永はその日の昼過ぎに訪ねた。事前に電話連絡をしてあったので、河原はいる筈であった。

案の定、河原は制服姿の森永の前に姿を見せた。だが、森永は、河原に森永の来訪の目的を話してなかった。

それ故、河原は制服姿の森永を見て、怪訝そうな表情を浮かべていた。

そんな河原に、森永は改めて自己紹介をしてから、

「実はですね。昨日の朝、曾原湖キャンプ場の近くで男性の遺体が見付かりましてね」と、河原の顔をまじまじと見やっては言った。

すると、河原は些か表情を険しくさせては、

「知っています」

すると、森永は小さく肯き、

「で、その男性は早野久雄さんという東京の方だったのですよ」

今朝の新聞やTVのニュースで、そのことは報道されてはいたが、その報道を河原は知らないかもしれないので、森永は改めて説明した。

すると、河原は、

「確かそのような名前でしたね」

と、表情を堅くさせては、淡々とした口調で言った。

すると、森永は再び小さく肯き、

「で、河原さんはその早野久雄さんのことをご存知なかったですかね？」

と、河原の顔をまじまじと見やっては言った。

すると、河原は表情を固くさせたまま、森永から眼を逸らせては言葉を発そうとはしなかった。

それで、森永は同じ問いを繰り返した。

すると、河原は、

「その男性の顔写真なんかはないのですかね？」

そう河原に言われ、森永は持参して来た久雄の死顔の写真を河原に見せた。

河原はその写真をさっと見やったのだが、すぐに眼を逸らし、そして、

「この人物を僕は知っていますよ」

と言っては森永を見やった。

すると、森永は小さく肯き、そして、

「つまり、この男性は、河原さんとこのペンションでアルバイトをしていたのですね」

「そうです。といっても、もう十一年前になるでしょうかね」

と、河原は神妙な表情を浮かべては言った。

「つまり、早野さんが学生時代だった頃のことですね」

「そうです。確か東京のS大の学生だったですね。で、早野さんが三年の時の夏季休暇の時に一ヶ月程アルバイトをやってもらいましたね」

と言っては河原は小さく肯いた。

すると、森永も小さく肯き、そして、

「で、早野さんはそのアルバイト時に、何か問題を起こしたりしませんでしたかね？」

と言っては河原の顔をまじまじと見やった。そんな森永は、森永の問いに対する河原の表情の変化を決して見逃すまいと言わんばかりであった。

そう森永に訊かれると、河原は、

「特に起こしたりはしませんでしたかね」

と、眉を顰めては言った。

「そうですかね？ それは間違いないですかね？」

森永は、怪訝そうな表情を浮かべては言った。そんな森永は、今の河原の返答は嘘だと言わんばかりであった。

すると、河原は渋面顔を浮かべては、

「それがですね。そのことに関して妙な話を僕は聞かされたのですよ」

と言っては、森永の顔をまじまじと見やった。

「妙な話？ それ、どういったものですかね？」

森永はいかにも興味有りげな表情を浮かべては言った。

「実はですね。一週間前の午後八時頃、電話が掛かって来ましてね。で、その電話の内容は早野さんのことでした。早野さんとは、今、刑事さんが話題にされた早野さんのことです。

で、先程も言いましたが、早野さんは十一年前にこのペンションでアルバイトをやっていたのですが、その時に何と盗撮カメラを客室に仕掛けては、密かにお客さんの様子を盗み見してたというのですよ。そう聞かされて、僕はびっくりしてしまいましたよ」

と、河原は些か興奮気味に言った。

「ということは、河原さんはそのことを一週間前までは知らなかったというわけですかね？」

「勿論そうです。だから、僕はもうびっくりしましたよ！」

と、河原は今でもその驚きを隠すことは出来ないと言わんばかりに言った。

「じゃ、早野さんがアルバイトをしてた当時は、そのような気配はなかったのですかね？」

「全くなかったですね。だから、僕はまさか早野さんがそんなことをしてたなんて今でも信じられないですよ」

と、河原は興奮しながら言った。

「なるほど。でも、一体誰がそう電話して来たのですかね？」

森永は、河原の顔をまじまじと見やっては言った。

「それがですね。その電話の主が何処の誰だか分からないのですよ」

と、河原は渋面顔で言った。

「何処の誰だか分からないですか……。その人物は自らの素性を名乗らなかったのですかね？」

「ええ。そうです」

「男だったのですかね？ それとも、女だったのですかね？」

「それも、分からないのですよ。男なのか女なのか分からないような声だったのですよ」

と、河原はいかにも決まり悪そうな表情を浮かべては言った。

すると、森永もいかにも決まり悪そうな表情を浮かべ、少しの間言葉を詰ませたが、やがて

「しかし、何処の誰だか分からない人なら、その話は信頼出来ないのではないのですかね？」

「正にそうなんです。ですから、僕はそのように言われても、あっさり信じることが出来なかったのですよ。

で、僕がそう思っていると、その人物はその証拠を持っていると言ったのですよ」

「証拠ですか……」

「そうです。何でも、その盗撮した映像をDVDに保存してあるとか言うのですよ。そこまで言われれば、僕はその話をあっさりとは否定出来なくなったのですよ」

と、河原はいかにも気難しげな表情を浮かべては言った。

森永も、この時、河原のように気難しげな表情を浮かべた。というのは、森永はこの時、久雄の妻であった早野麻由子のことを思い出したからだ。というのは、元はといえば、久雄が河原のペンションで盗撮をしていたと森永に言ったのは、麻由子であったからだ。となると、一週間前に河原に久雄の盗撮に関して電話したのは、麻由子である可能性が極めて高いであろう。

それが事実だとすると、何故麻由子はそのような電話をしたのだろうか？

それはともかく、森永は今、久雄の死の真相を明らかにしなければならないということを忘れてはならない。そして、麻由子からの話を聞いて、今、森永の眼前にいる河原に疑いを抱き、河原が営んでいる『木馬』にまでやって来ては河原から話を聴いているのだ。そのことを忘れてはならない。

それで、

「で、その早野さんが昨日の朝、この近くで他殺体で見付かったのですよ。で、それに関して河原さんはどう思いますかね？」

と、河原の顔をまじまじと見やっては言った。

すると、河原は、

「そりゃ、びっくりしましたよ」

と、些か興奮しながら言った。

すると、森永は、

「それだけですかね？」

と、河原の顔をまじまじと見やっては言った。

「それだけとは？」

河原は怪訝そうな表情を浮かべては言った。

「ですから、早野さんが死んだことに関しての河原さんの感想が、それだけなのかということですよ」

と、森永は河原の顔をまじまじと見やっては訊いた。

すると、河原は、

「そりゃ、可哀相だと思いましたよ。僅か一ヶ月といえども、共に時を過ごした人物ですからね」

と、神妙な表情で言った。

「一ヶ月間、共に時を過ごしたということは、このペンションに住み込みでアルバイトをしてたのですかね？」

「勿論、そうです」

「何故、早野さんはこのペンションでアルバイトをするようになったのですかね？」

「僕が求人誌にアルバイト募集の広告を出したのですよ。それを見て早野さんが応募して来たのですよ」

「なるほど。では、早野さんは盗撮といった行為を行ないそうな人物でしたかね？」

「いや。その当時はそのような行為を行なう人物とは、とても思いませんでしたね。きちんと仕事をやってくれてましたし」

と、河原は神妙な表情を浮かべては言った。

「なるほど。で、早野さんの死亡推定時刻は、一昨日の午後四時から五時の間なんですがね。で、その頃河原さんは何処で何をしましたかね？」

と、森永は河原の顔をまじまじと見やっては言った。

すると、河原は突如表情を陰しくさせた。そんな河原は、森永のその問いに大いに動揺したかのようにであった。

そんな河原は、少しの間険しい表情を浮かべては言葉を詰まらせていたのだが、やがて、

「ははあ……。刑事さんは僕のことを疑っているんですね？」

と言っては、唇を歪めた。

すると、森永は、

「早野さんは午後三時過ぎに五色沼探勝路を柳沼の方から出発し、午後四時頃に毘沙門沼に着いたと思われるのですよ。で、毘沙門沼近くの国道459に面した駐車場で奥さんと待ち合わせをしましてね。で、奥さんはその駐車場に午後四時二十分頃着いたらしいです。そして、そこに早野さんがいる筈だったのですよ。しかし、いつまで経っても早野さんは現れなかったのです。」

そのことから、奥さんが国道459に面した駐車場に着くまでに早野さんは誰かと会い、そして、その誰かと共に何処かに行き、そして、殺され、遺体を曾原湖キャンプ場近くに遺棄されたと思われるのですよ」

と言っては、小さく肯いた。

「では、刑事さんはその誰かが、僕だと思ってるのですかね？」

と、河原は些か不満そうに言った。

「可能性はあると思います」

と言っては小さく肯いた。

「何故そう思うのですかね？」

河原は、些か納得が出来ないように言った。

「ですから、盗撮のことです。河原さんは早野さんが盗撮していたと聞かされ、早野さんにそのことを問い詰めてやりたいと思っていました。そんな折に偶然その駐車場で、河原さんは早野さんと会ってしまったのです。それで、河原さんは人気の無い所に早野さんを呼び出しては、そのことを早野さんに確認したのですよ。すると、何故か早野さんはそれを認めたのです。

それで、かつとした河原さんは、早野さんの隙を見ては後頭部を鈍器で殴り、殺してしまったというわけですよ」

と、森永はその可能性は充分にあると言わんばかりに、自信有りげな表情と口調で言った。

すると、河原は、

「その話は全くの出鱈目ですよ。正に刑事さんの作り話ですよ」

と、いかにも愉快そうに言っては笑みを浮かべた。そんな河原は、まるで森永の推理は馬鹿馬鹿しくて話にならないと言わんばかりであった。

そう河原に言われ、森永はいかにも決まり悪そうな表情を浮かべていると、そんな森永に河原は、

「実はですね。僕はまだ刑事さんに話さなければならぬことがあるのですがね」

と、些か真剣な表情を浮かべて言った。

そんな河原を見て、森永は、

「ほう……。それ、どんなことですかね？」

と、いかにも興味有りげな表情を浮かべては言った。

すると、河原は些か真剣な表情を浮かべたまま、

「実はですね。僕は一昨日、つまり早野さんが亡くなった日に、僕は早野さんと会っているのですよ」

と、森永から些か眼を逸らしては言った。

すると、森永は些か表情を綻ばせた。何故なら、森永がそのことを河原から自供させるまでに、河原の方からあっさりとしてそれを認めてくれたからだ。それ故、これによって捜査は一気にやり易くなったと思い、森永は思わず表情を綻ばせたのである。

そんな森永を見て、河原は、

「刑事さん！ 誤解しないでくださいよ！僕は早野さんを殺しはしなかったですからね！」

と、正に誤解されては堪らないと言わんばかりに声を張り上げて言った。

すると、森永は表情を改め、

「分かりましたよ。で、とにかく話の続きを聞かせて下さいよ」

と、まだ河原が久雄を殺したと確定したわけではないので、とにかくそう言った。

すると、河原は小さく肯き、そして、

「確か午後二時頃だったと思いますが、僕は曾原湖キャンプ場の近くで早野さんと会ったのですよ。

で、何故その時に僕が早野さんと会ったのかというと、その少し前に僕に電話が掛かって来たのですよ」

と、神妙な表情で言った。

「電話ですか……」

と、森永は呟くように言った。

「そうです。電話です。今、早野さんが曾原湖キャンプ場の近くにいるから、早野さんと会って盗撮の件で話をしてくれないかという内容の電話ですよ」

と、河原は渋面顔で言った。

「一体誰がそう電話して来たのですかね？」

森永は興味有りげに言った。

「それがですね。どうも女の声のようだったのですよ。でも、絶対にそうだと断言は出来ないのでですよ」

と言っでは、河原は眉を顰めた。

「男なのか女なのか分からないような声だったのですか？」

「そうです。で、僕が思ったのには、その電話の主は意図的に自らの声を分からなくさせてるような感じだったのですよ」

そう河原に言われると、森永は、

「恐らくその電話は、早野さんの奥さんからの電話だったと思いますね」

と、些か自信有りげな表情と口調で言った。

「奥さんですか……」

「ええ。そうです。早野さんの奥さんは、早野さんが河原さんのペンションで盗撮を行っていたということを僕に話しましたからね。それに、早野さんはこの裏磐梯に奥さんと二人で来ていたことから、河原さんに電話したのは奥さんですよ」

と、森永は再び自信有りげな表情と口調で言った。

すると、河原は、

「でも、奥さんの姿は見当たらなかったのですがね」

と、渋面顔で言った。

そんな河原に、森永は、

「で、河原さんは曾原湖キャンプ場の近くで早野さんと会って盗撮のことで話をしたのですかね？」

「そりゃ、勿論しましたよ」

と、河原は当然だと言わんばかりに言った。

「で、河原さんにそう言われ、早野さんはどうしましたかね？」

「即座に否定しましたよ。そして、その早野さんの表情は、一体僕が何を言い出すのかと言わんばかりのものでしたね。

で、僕はそんな早野さんに、その証拠として盗撮した映像を録画したDVDがあるんだぞと、言ったのです。

で、早野さんが亡くなる三日前に、そのDVDが僕のペンションに郵送されて来たのですよ。で、差出人は鈴木治郎となっていました、それは出鱈目だと思いました。でも、そのDVDには人は映っていなかったものの、確かに僕のペンションの部屋が映っていたのです。それ故、僕は早野さんが盗撮していたことを信じました。また、そのDVDを僕に郵送して来たのは、早野さんにとってかなり身近な人で、また、早野さんと仲が良くない人だと思いましたね。そうでないと、早野さんの悪事を僕に告げ口したりしないでしょうからね。

それはともかく、僕のペンションでそのような卑劣な行為を早野さんが行っていたということで、僕は早野さんに罵詈雑言を浴びせてやったのですよ。

しかし、早野さんは懸命に否定しました。そして、そのDVDを見せてくれと言うのですよ。

でも、僕はその時忙しくて、早野さんにそのDVDを見せる時間がなかったので、午後八時頃に僕のペンション、即ち『木馬』に来てくれないかと言い、早野さんは承諾したのですよ。

ところが、その日、早野さんは僕のペンションに来ませんでした。そして、その翌朝、早野さんの遺体が曾原湖キャンプ場の近くで見付かったというわけですよ」

と、河原はいかにも決まり悪そうな表情を浮かべては言った。

そんな河原に森永は、

「それ、間違いないですかね？」

「間違いないですよ」

河原は、いかにも真剣な表情を浮かべては言った。

すると、森永は腕組みをしては、いかにも困惑したような表情を浮かべては、言葉を詰まらせてしまった。何故なら、事件がどうやら当初思ってもみなかった展開になって来たからだ。今の河原の証言が事実なら、当初思ってもみなかった人物に疑惑の眼を向けなければならなくなったのだ。

それはともかく、森永は河原に、

「今の話を河原さんの方から我々に話してくれなかったのは、河原さんに疑惑の眼が向けられるのを河原さんが嫌った為ですかね？」

と、河原の眼をまじまじと見やっては言った。

すると、河原は眼を大きく見開き、

「正にその通りですよ。今の話を警察があっさりと信じてくれるとは限りませんからね。つまり、僕は自らで火の中に飛び込んで行くことはないと思ったのですよ」

と、正に河原の気持ちを分かってくれと言わんばかりに言った。

5 麻由子の証言

やがて、森永は署に戻ると、既に東京に戻ったという早野麻由子に電話して、麻由子から話を聞いてみることにした。そして、呼出音が七回鳴った後、電話は繋がった。

「福島県警の森永ですが、奥さんに少し確認したいことがあるのですがね」
「それは、どんなことですかね？」

「実はですね。ご主人が学生時代にアルバイトをしてたという『木馬』というペンションのオーナーである河原さんから話を聞いたところ、妙なことが分かりましてね」

「とっては、河原から聞いた話の凡そを麻由子に話した。」

麻由子は、そんな森永の話に何ら言葉を挟むことなく、じっと耳を傾けていたが、森永の話が一通り終わると、

「つまり、刑事さんは河原さんに主人のことを告げ口したのは、私だとおっしゃりたいのですかね？」

と、麻由子は真剣そうな表情を浮かべては言った。もっとも、麻由子と電話で話をしている森永は、そんな麻由子の表情を眼にしなかったが。

森永は、麻由子にそう言われると、

「まあ、そうです」

と。眉を顰めて言った。

すると、麻由子は十秒程言葉を詰まらせたが、やがて、
「確かに刑事さんのおっしゃる通り、その電話は私がしました。」

と、率直にそれを認めた。

すると、森永は眼を大きく見開き、そして、

「何故、そのようなことをされたのですかね？」

と、いかにも納得が出来ないように言った。

「私は、主人が憎かったからです。」

「憎かった？」

「ええ。そうです。主人の浮気に私は腹が立ち、最近は喧嘩が絶えなかったのです。で、私は主人に殴られ、唇が切れたこともあるのです。それで、主人を懲らしめてやろうと思い、出鱈目なことを河原さんに言ったのです。」

と、麻由子は決まり悪そうな表情を浮かべては言った。

「出鱈目なこと？」

「ええ。そうです。つまり、盗撮のことです。主人は私に、大学三年の時に『木馬』でアルバイトをやったことを話し、そして、『碌でもない雑誌でペンションでアルバイトをやったフリーターが、客室に盗撮カメラを隠し愉しんでたという記事を見たが、俺もそんなことをやってみたかったな』と、言ったことがあるのですよ。でも、やったとまでは言いませんでした。つまり

、主人は盗撮を行なっていなかったのですよ。

そう麻由子に言われ、森永は呆気にとられたような表情を浮かべた。話が何だかややこしくな
って来たと森永は察知したのである。

そんな森永に麻由子は話を続けた。

一でも、先程も言ったように、最近主人と喧嘩が絶えなかったので、主人に嫌がらせをしてやろ
うと思い、出鱈目な話、つまり、主人の盗撮のことを河原さんに話し、そして、主人と共に裏磐
梯にいる時に、密かに河原さんに電話をしては、今、曾原湖キャンプ場の近くにいるから、早野
久雄に盗撮のことを問い詰めてやってくださいというようなことを私は河原さんに話したので
すよ。

もともと、私はその時に、男のような声で言いました。そのようなことを私が電話したと知ら
れるのはやはり嫌ですからね。

と、麻由子は再び決まり悪そうな表情を浮かべては言った。

「じゃ、DVDのことはどう説明するのですかね？ 河原さんは、河原さんのペンションの部屋
が映ったDVDが郵送されて来たと言っていました」

一そのDVDは私が撮り、そして、私が郵送しました。つまり、私は一ヶ月程前に主人に内緒
で『木馬』に行ったのですよ。その目的は無論『木馬』の部屋の中をカメラで撮影する為です。
そして、その映像を見せれば、河原さんは主人が盗撮してたという私の出鱈目を信じると思っ
たのですよ。

と、麻由子はいかにも決まり悪そうな表情を浮かべて言った。

「でも、十一年前と今とでは、部屋の中の様子が違っていると思うのですが」

一いや。そうではありません。私は『木馬』に行く前に、『木馬』周辺のペンションに電話をし
ては、『木馬』のことを訊いてみたのですよ。すると、『木馬』は十一年前から部屋の中は何ら
リフォームが行なわれていないことが分かったのですよ。

「なるほど。でも、ご主人を困らせてやろうとするのなら、何かもっと別の手があったと思うの
ですがね。それなのに、ご主人が大学生の時のアルバイトで盗撮をしてたということを持ち出し
たことは、何となく納得が出来ないのですがね」

と、森永は渋面顔で言った。

すると、麻由子は、

一そんなことはありません。そのようなことが公になれば、主人の信用がなくなり、主人は仕事を
辞めなければならないと思います。何しろ主人は公務員でしたからね。

また、私が主人と離婚出来る為の口実ともなります。私は主人と離婚したいのに、主人は離婚
させてくれませんでしたからね。

と、麻由子は声を荒げて言った。

「なるほど。でも、実際にはご主人は盗撮をされてなかったのですよね」

一そうですが、しかし、社会を騙すということは可能ですよ。いわば、冤罪を押し付けることは
可能というわけですよ。そうになってしまえば、それは私にとってざまみろというわけですよ。

と、麻由子は甚だ表情を険しくさせては言った。

森永はそう麻由子に言われ、麻由子という女は何て恐ろしい女だと思った。また、愛し合って結婚した筈なのに、何故これほどまでにその伴侶に憎悪を抱くようになったのかとも思った。

それはともかく、今の麻由子の話によって、事の成り行きは凡そ分かった。

だが、その反面、事件解決に遠のいてしまったとも思った。

というのは、河原の話を聞いて、森永は麻由子に疑いを抱いたのだ。夫婦間のトラブルによって殺人事件が発生することは何ら不思議ではないからだ。麻由子はいかなる理由か分からないが、久雄と仲違いし、久雄が大学時代にアルバイトをしていたという『木馬』のオーナーである河原に盗撮の件を告げ口した。何故、そのようなことをしたかという、恐らく久雄殺しの犯人を河原と思わせる為であろう。河原は久雄が『木馬』でアルバイトをしていた時に盗撮をしていたことを知り、また、久雄が裏磐梯にやって来たことを受けて、久雄と会っては久雄を激しく詰り、そんな河原に久雄が反発し、その結果、河原がかつとして久雄を殺す。しかし、それは麻由子の策略だったというわけだ。実際には、麻由子が久雄を殺したのだが、それを誤魔化す為に、麻由子が策略を用いたというわけだ。森永は河原と話した結果、そのように推理したのである。

だが、今の麻由子の証言を聞くと、森永のその推理は、誤った推理ではないのかという気がしたのだ。

というのは、麻由子は率直に自らが河原に久雄の盗撮を告げ口したことを認め、更にその盗撮は自らの作り話であることを明らかにした。そして、何故そのようなことをしたのかも説明した。

即ち、もし麻由子が策略を用いて河原を久雄殺しの犯人に仕立てようとしたのなら、そこまで麻由子の策略を警察に話さないのではないのかということだ。そこまで警察に説明したともなれば、麻由子に疑いの眼を持たれることは十分に有り得るのだ。何しろ、麻由子には久雄を殺したという動機が有り得るからだ。何しろ、麻由子は久雄が嫌い、また、離婚したがっていたのだ。そんな久雄と喧嘩となり、かつとして久雄を殺しても不思議ではないのだ。

それ故、もし麻由子が犯人なら、そこまで率直に自らの手口を森永に話さないのではないかと森永は思ったのである。

そして、麻由子は更に話を続けた。

一で、一昨日の午後二時過ぎに、主人と河原さんが会ったのは確実ですよ。何故なら私はその十分位前に、河原さんに電話したのですから。今、早野久雄が曾原湖畔にいるということを。で、その時、私は久雄に何かと理由をつけて、久雄から少し離れた所にいました。というのは、河原さんに妙な電話を掛けたのが私だと河原さんに知られるのは嫌でしたし、また、久雄と河原さんが口論する現場にいたくないと思いましたからね。

それはともかく、久雄と河原さんはかなりの口論をしたみたいですよ。久雄はそのことを私に話しましたからね。

と、麻由子は淡々とした口調で言った。

そんな麻由子に、

「で、ご主人は奥さんに『お前が河原さんに俺の盗撮のことを話したのか』と言いましたかね？」

」

と、森永は訊いた。森永の口からその疑問が発せられるのは、自然の成り行きであるかのようであった。

—それがですね。そのようなことは、言わなかったのですよ。

と、麻由子は神妙な表情で言った。

「それは、何故でしょうかね？」

—恐らく、そのようなことまで、主人は頭が働かなかったのではないかと思います。先程も言いましたが、主人は河原さんのペンションで盗撮は行なっていませんでした。それは、私の作り話だったのです。それで、その話は正に主人にとって寝耳に水で、まさか私がそのような話を河原さんに持ち出したとまでは考えが及ばなかったのだと思います。また、河原さんもそのような電話があったということをお話さなかったのでしょうか。

即ち、主人は私がそのようなことを河原さんに話したんじゃないかと、私に言うまでに死んでしまったというわけですよ。

と、麻由子はまるで森永に言い聞かせるかのようにつづけた。

そう麻由子に言われ、森永は渋面顔を浮かべては言葉を詰まらせてしまった。何だか話が一層ややこしくなって来たような気がしたからだ。

そう思った森永に、麻由子は更に話を続けた。

—で、今まで私が刑事さんに話したことには、何ら嘘はありません。で、五色沼探勝路の話も嘘ではありません。その話も事実なのです。

「つまり、奥さんが毘沙門沼方面から出発し、ご主人が柳沼方面から出発したということですかね？」

—そうです。そして、主人と途中で会い、そして、私は柳沼方面に向かい、そして、柳沼近くに停めてあったマイカーに乗って毘沙門沼近くの大きな駐車場に行き、主人を待っていたが主人は現れず、その翌朝、主人の死を知ったという話は、嘘ではないということです。

まるで、冷静で落ち着いたその麻由子の話を聞いて、麻由子と直に顔を合わせて麻由子の話を聞いているわけではないものの、麻由子は本当のことを言っているのではないかという気が森永はした。

となると、どういうことになるのか？ 一体誰が久雄を殺したというのか？

森永はそれがまだ分からなかった。

そんな森永の口からは、

「じゃ、奥さんは一体誰がご主人を殺したと思ってるのですかね？」

という言葉が自ずから発せられた。

すると、麻由子は、

—やはり、河原さんが怪しいと思いますね。

「河原さん？ どうしてそう思うのですかね？」

森永は眉を顰めて言った。

すると、麻由子は、

「以前も話しましたが、この裏磐梯では主人は河原さんしか知り合いがいなかったと思うので

すよ。それに、河原さんは私の嘘をあっさりと信じてたみたいですから。

つまり、河原さんは主人に強い怒りを抱いたと思うのですよ。そんな河原さんが、毘沙門沼近くの駐車場で私と主人が会う前に主人と会ったとしたら、無理矢理主人のことを人気の無い場所に引っ張って行き、そして、喧嘩になったかもしれません。

その結果、かっとした河原さんが主人を殺し、その遺体を曾原湖キャンプ場近くに遺棄したというわけですよ。

と、麻由子は些か自信有りげな表情と口調で言った。

そう麻由子に言われ、森永はその可能性は有りそうだと思った。

しかし、その証拠はまだない。まだ、推理に過ぎない。

とはいうものの、麻由子から聴きたい事は一通り聴いたということもあり、この辺で一旦麻由子との電話を終えることにした。

6 ペンション経営者たちの証言

麻由子との電話を終えると、正に思ってもみなかった思いを森永は抱いてしまった。

即ち、河原に対する疑念を抱いてしまったのだ。麻由子と電話で話をするまでには、河原が怪しいという思いは切り捨てていたのだ。麻由子と電話で話をする前に、森永は河原と直に会って話を聴いた。河原と話をするまでは、河原を怪しいと思ったこともあったのだが、河原と話をした結果、その思いを切り捨てたのだ。だが、麻由子と電話で話をした結果、河原に対する疑念が再燃してしまったのである。

もっとも、それは麻由子の話に嘘がないと看做してのことだ。麻由子はその犯行を隠し、河原にその罪を擦り付ける為に、森永に出鱈目を言ったという可能性が百パーセントないとは断言は出来ないのだ。それ故、麻由子の話を百パーセント信じるのは危険なのだ。

とはいうものの、河原が犯人である可能性も充分にある。

それ故、河原犯人説に基づいて、森永は今度は捜査してみることにした。

そんな森永は『木馬』の近くで『木馬』と同じようなペンションを営んでいるそのオーナーたちにまず聞き込みを行なってみた。

すると、興味ある情報を入手することは出来た。『ブルースカイ』というペンションのオーナーの五十位の高橋という男が、

「『木馬』は今、経営が苦しいのではないですかね」

と、いかにも神妙な表情で言った。

そんな高橋の話に興味を抱いた森永は、

「ほう……。それはどうしてですかね？」

と、いかにも興味有りげに言った。

「最近、この裏磐梯に次から次へと大型ホテルがオープンしましてね。その影響を我々個人で営んでいるペンションはもろに受けてしまったというわけですよ」

と、高橋は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべて言った。そんな高橋は、経営が苦しいの『ブルースカイ』も同じだと言わんばかりであった。

「つまり、お客さんを大手ホテルに奪われてしまったということですかね」

森永は神妙な表情で言った。

「そうです。それらのホテルが出来る前は、お客さんも多く、経営は順調だったのですが、最近では経営の思わしくない所が多いのですよ。

ですから、リピーターや長期滞在客なんかには力を入れて経営はしてるのですが、『木馬』はこの辺りのペンションの中ではかなり古いですからね。つまり、建物がかなり老朽化してるということです。泊まる方としては、新しい建物の方を選びますからね。

ですから、料金を下げないと、お客さんを確保出来なくなって来るのですよ。そうなれば、一層経営は苦しくなるのですよ。

で、河原さんは『木馬』を改装するお金がないと零していましたよ」

と、高橋は神妙な表情を浮かべては淡々とした口調で言った。

そう高橋に言われ、森永は、

「なるほど」

と、肯いたものの、果して今の高橋の話が事件解決に繋がるとは思えなかった。

それで、引き続き辺りのペンション等の関係者に聞き込みを続けてみた。

すると、正に有力な証言を入手出来た。その証言を森永にもたらししたのは、『木馬』の近くで『チェリージャム』というペンションを営んでいる前田剛志（52）の妻である沙織であった。

沙織は森永が河原のことで何だかんだと訊いてる時に、

「そう言えば、三日前の午後四時過ぎ頃、小野川湖畔にあるキャンプ場の近くで私は河原さんが運転する車と擦れ違ったのですよ。その車はパジェロで、私は河原さんとこの車がパジェロであることを知っていましたから、あれは絶対に河原さんに間違いないですね」

と、甚だ自信有りげに言った。

「河原さんは小野川湖畔のキャンプ場に行ったのですかね？」

「それは何とも言えません。でも、そちらの方に向かっていたのは間違いありませんよ。で、私はデコ平の方から戻って来たのですが、河原さんは何処に行くのかと思ったのですよ。」

で、河原さんの車の助手席には男の人が乗ってましたよ。私はその人をさっと見たのですが、全く知らない人だったので、お客さんなのかと思いましたね」

そう沙織に言われ、森永の表情は俄然輝いた。何故なら、その沙織が眼にしたという男に森永は俄然興味を抱いたからだ。

そんな森永は、

「で、前田さんはその男のお客さんの顔を今でも覚えていますかね？」

と、沙織の顔をまじまじと見やっては言った。

すると、沙織は、

「それは、無理ですよ」

と、苦笑しながら言った。

「では、年齢はどれ位だったか、わかりますかね？」

「そうですね……。中年という所までは言ってなかったと思いますね。そうかといっても、若者とも思えなかったですね。ですから、三十前後ではなかったのですかね」

と、眉を顰めて言った。

そう沙織に言われ、森永は小さく肯いた。何故なら、早野久雄は三十三であったからだ。

即ち、四時過ぎ頃、前田沙織が小野川湖畔にあるキャンプ場の近くで擦れ違ったという河原が運転するパジェロの助手席に乗っていた男は、早野久雄である可能性は充分にあるというわけだ。

そう思うと、森永の表情は俄然険しくなった。

そんな森永は、

「で、河原さんは前田さんが運転する車と擦れ違ったということに気付いたのでしょうか？」

「いや。気付かなかったと思いますよ」

と、沙織は首を振った。

「では、改めて訊きますが、三日前の午後四時過ぎ頃、前田さんは前田さんの車に乗って五色沼の方に向かっている時に、河原さんが運転してるパジェロに擦れ違い、そのパジェロの助手席には前田さんが知らない三十位の男性が乗っていたのですね？」

「そうですよ。絶対に間違いないですよ」

と、沙織は甚だ自信有りげな表情と口調で言った。

その前田沙織の正に事件解決に導くと思われる重大な証言を受けて、直ちに河原から再び話を聴くことになった。

7 追い詰められた容疑者

森永の話に何ら言葉を挟むことなくじっと耳を傾けていた河原は、森永の話が一通り終わっても、渋面顔を浮かべてはすぐに言葉を発そうとはしなかった。そんな河原の双眸は、凜々しげな辺りの木立に向けられてはいたものの、その様はまるで眼に映っていないかのようであった。

そんな河原を眼にして森永は、前田沙織の証言はやはり事実だと看做した。

となれば、早野久雄を殺したのは、森永の眼前にいるこの河原治郎という五十七歳の男となる

。

そう思うと、森永の表情は自ずから険しいものへと変貌した。

河原が森永の問いに渋面顔を浮かべては、なかなか言葉を発そうとはしないので、森永は同じ問いを繰り返した。

すると、河原は、

「それ、やはり僕じゃないですよ」

と、森永をちらちらと見やっては、素っ気無く言った。

すると、森永は、

「前田さんは、絶対にその男性は河原さんだったと断言してるのですがね」

と、いかにも不満そうに言った。

すると、河原は些か笑みを見せては、

「どんな人でも見間違いというものはありますからね。で、前田さんもその見間違いをしただけですよ」

と、いかにも余裕有りげに言った。

そう河原に言われ、森永は困ってしまった。

もし、河原が前田沙織の証言を認めれば、それで事件は解決したみたいなものだ。そう森永は思っていたのだが、そうは問屋が卸さなかったのである。

とはいうものの、その河原の証言は嘘である可能性が極めて高い。

それ故、その嘘を嘘だと暴かなければならない。

それで、森永は、

「じゃ、その頃、つまり三日前の午後四時から五時頃にかけて、河原さんは何処で何をしましたかね？」

と、厳しい表情で河原の顔をまじまじと見やっては訊いた。

すると、河原は、

「そりゃ、この『木馬』で、仕事をしてましたよ」

と、些か自信有りげな表情と口調で言った。

「じゃ、河原さんのパジェロもこの『木馬』の駐車場に停められていましたかね？」

「そりゃ、勿論ですよ」

と、河原は再び自信有りげな表情と口調で言った。

その河原の証言を受けて、直ちにその日の午後四時から五時に掛けて河原のパジェロが『木馬』の駐車場に止められていたかどうかの捜査が行なわれた。

そして、その結果はすぐに出た。というのは、『木馬』の近くで『茜』というペンションを営んでいる景山明夫という四十八歳の男性が、

「僕は午後四時半頃、『木馬』の近くを通りましたが、河原さんのパジェロは『木馬』の駐車場に止められてませんでしたよ」

と、にこにこした表情で証言したからだ。

その景山明夫の証言を受けて、河原は署に出頭を要請された。それは、任意という形ではあったが、いわば強制的みたいなものであった。

河原は最初の内は、前田沙織の証言も景山明夫の証言も否定していたが、森永から、今の時点でも河原を早野久雄殺しの疑いで逮捕することは可能だと力説されて、もう逃れられないと判断したのか、早々と早野久雄殺しを認めた。

河原は、

「僕は、早野さんに脅されたのですよ」

と、いかにも悔しそうに言った。

「脅された？」

河原のその言葉の意味が分からなかった森永は、怪訝そうな表情を浮かべては言った。

「そうです。脅されたのですよ。」

刑事さんにも話したように、早野さんが死ぬ一週間程前に、僕の見知らぬ人物から電話が掛かって来て、十一年前に早野さんが僕のペンションでアルバイトをしていた時に盗撮を行っていたという話を聞かされたのです。その話は僕にとって正に寝耳に水でした。そのようなことは今までに思ってもみなかったからです。更にその電話の人物は、一週間後にその早野久雄が裏磐梯に行くから、その時にその盗撮のことを問い詰めてやってくれと言うのです。更に、その人物はその証拠となるDVDも持っていると言うので、僕はその人物の話は出鱈目ではないと思ったのです。

それと同時に、僕は早野久雄に対して激しい怒りが込み上げて来ました。早野久雄は真面目そうな感じで、仕事もきちんとしてくれたということを覚えていたのですが、僕の眼を盗んではそんな卑劣な行為を行っていたとなれば、僕はただで済まないぞと思ったというわけです。

で、その人物から電話で早野久雄の盗撮に関しての話を聞いて一週間後の午後二時を少し過ぎた頃、電話が掛かって来て『今、早野久雄が曾原湖キャンプ場の近くにいるから、十一年前の盗撮に関して問い詰めてやってくれ』と僕は言われました。そして、その電話の人物の声は、一週間前の電話の人物の声とは違っていきなような気がしましたが、僕はとにかく半信半疑の表情を浮かべては、曾原湖キャンプ場の近くに行ってみました。すると、やはりそこに早野久雄がいたのです！

早野久雄と会うのは僕は十一年振りでしたが、その男が早野久雄だということは、明らかに分かりました。

で、僕が早野に近付いて行くと、早野はびっくりしたような表情を浮かべました。そんな早野に僕は、

『久し振りだな』

と、単刀直入に盗撮の件を切り出しました。

すると、早野は盗撮のことを強く否定しました。しかし、僕はその証拠となるDVDも残っているとっては、強く早野のことを詰りました。すると、早野はそんな僕のことを頭にきたのか、とんでもないことを言ったのです。

そのとんでもないこととは、早野が僕のペンションでアルバイトをしていた時に、僕は実はお客さんを騙していたことがありまして……。

というのは、お客さんには自家製の無農薬の野菜だと説明していたものの、それは嘘で、実はあるルートから仕入れた農薬が使われたものだったのです。でも、そういったことをピーアールしないと、お客さんは確保出来ませんからね。そして、そのことを僕のペンションでアルバイトをしていた早野は知っていたのです。

そして、早野は僕に『僕が盗撮をしたなんてそんな出鱈目なことを言いやがって！ だったら、河原さんの無農薬野菜のことをばらしてやる！』と、凄い剣幕で言ったのです。

そして、その時、人がやって来たので、その話をそのまま続けるのはまずいと思い、僕はその日の午後八時にもう一度その件に関して『木馬』で話をしようと早野と約束し、そして、早野にこれから何処に行くのか訊き、そして、その時はそれで別れたのです。

で、その時に早野はこれから五色沼探勝路を歩くと言ったのですが、僕は僕の仕事が一区切りついた午後四時頃、特に深い理由があったわけではないのですが、毘沙門沼近くの駐車場に行ったのです。すると、午後四時十分頃、その駐車場に早野が姿を見せたのです。

それで、そんな早野に近付いて行っては先程のことで少し話がある行って、早野を僕のパジェロに乗せました。そして、小野川湖畔のキャンプ場の方に向かいました。というのも、僕は人気の無い場所で話をしたかったからです。先程の話は、人気がある場所ではとても出来ませんからね。

で、僕がそう言うと、早野は渋々僕の言い分に納得したものの、度々『何処まで行くんだ』と、苛立ったように僕に訊きました。何しろ、僕は僕のパジェロに早野を乗せては毘沙門沼からどんと遠ざかって行きましたからね。

で、その時の早野の口調にも、僕は心の中で随分と腹が立っていました。というのも、十一年前に僕のペンションでアルバイトをしていた時は、正に僕のことをご主人様と言わんばかりにぺこぺこしてたのに、その時僕に見せた態度は、まるで立場が逆転、つまり僕のことを使用人であるかのような態度を見せたからです。

それはともかく、やがて小野川湖畔のキャンプ場に来ました。そのキャンプ場には今は人気が無いということを僕は知ってましたからね。そして、案の定、そこには人気は見られませんでした。

だが、僕たちはパジェロから降りることもなく、早速話を始めました。

で、僕は再び盗撮のことを問い詰めたのですが、頑なに早野はそれを認めようとしませんでした。

した。でも、僕はその証拠となるDVDを持っているというと、早野は、『そのDVDはいんちきだ！』と言っては、てんで僕の言い分を認めようとしません。そして、『そんな出鱈目なことを言うのなら、あんたの無農薬野菜のペテンを世に公表してやるからな！俺は役所に勤めているから、そんなこと位簡単に出来るんだ！』と、横柄な口調で僕に抗ったのです。

僕はそう早野に言われ、頭に血が上りました。僕は時々役所に行って役人と接したりしてるのですが、その時の役人たちの横柄な態度にむかついたことは度々あるのです。そして、今の早野の言葉がその僕の怒りに火をつけたのです。また、最近、僕のペンション経営がうまくいっていないという苛立ちも、僕の怒りに火をつけたのかもしれない。

だが、その時、早野は既に僕のパジェロから降りていました。この場から毘沙門沼間では少し距離があるのですが、早野は歩いて戻ろうと思ったのかもしれない。

で、僕はそんな早野の後ろ姿を見て、もう自分を抑えることは出来ませんでした。気がつけば、車にあったハンマーで早野の後頭部を思い切りぶん殴ってしまったのです。すると、早野は呆気なく死んでしまったのです。

で、僕はそんな早野の死体をとにかくパジェロに入れました。早野の死体をその場に遺棄するのはまずいと思ったからです。

で、僕のパジェロに早野の死体を乗せたまま、一旦僕のペンションに戻り、深夜に早野の死体を曾原湖キャンプ場の近くに遺棄したというわけですよ」

この河原の自供によって、早野久男の事件は解決した。

とはいうものの、何となく後味の悪さは残った。というのは、この事件は、元はといえば、早野麻由子が引き起こしたみたいなものだからだ。早野麻由子が久雄を困らせようと、河原に妙な電話をしなければ、久雄は河原に殺されることはなかった筈だからだ。それなのに、この事件を引き起こす元となった早野麻由子は、何ら罰せられることはなかったのだ。

森永は事件解決の報告を麻由子にした時に、それとなく、その森永の思いを話した。

すると、麻由子は決まり悪そうな表情を浮かべては、まるで逃げるように森永の許から去って行ったのであった。

(終わり)

この作品はフィクションで、実在する人物、団体とは一切関係ありません。また、風景や建造物等が実際とは多少異なっていることをご了解ください。